山口大学教育学部研究論叢　第 67 巻　213 頁～ 217 頁　2018 年 1 月

地方都市における美術連携事例
－コレクティヴ EAS_Y Vol.2 及び防府天満宮花回廊事業について－

中野良寿・屋良彩姫 *・西澤　佑 **

A case study in cooperation with fine arts and local city
-About the case of Collective EAS_YVol.2 and HANA-KAIRO in Hofu Tenmangu-

NAKANO Yoshihisa, YARA Sayaki, NISHIZAWA Yu

（Received September 29, 2017）

はじめに

近年の日本の地方都市における商店街の空洞化や人口減少、高齢化などの問題に対して、商店街の活性化や空き家対策、地方への積極的な公共投資など、多くの方策が行われるようになって久しいのは周知の事実である。筆者の所属する山口大学がある山口県においても同様の課題を抱えた市町村が多数ある。本稿では平成28年度から防府市松崎町へ移転したオルタナティヴ・スペース、N3ART Labが行なった文化庁主催、Collective EAS_YVol.2事業（注１）と防府市防府天満宮の参道にある大石段を舞台に５月のゴールデンウイークの時期に毎年設置される花回廊事業を例にとり、地方都市における美術連携事例の特徴について述べる。

１．防府市とN3 ART Labについて

防府市は山口県の中央南部に位置し、一級河川の佐波川が瀬戸内海の周防灘に注ぐ河口に形成された平野にある。人口約11万人（2017年現在）[*1]、古墳時代からの古い歴史をもつ地方都市でもある。周防国分寺や防府天満宮などの寺社仏閣があり、アニメーションでの映画化もされた小説家・高木のぶ子の自伝的小説『マイマイ新子』でも舞台となった条里制の遺跡も残る。米作などの農業が盛んな他、かつては三田尻港近くに塩田などもあった。塩田の跡地は工場になり、周南工業地域の西端部を担っている。この防府市は山口県の人口からすると13市の中で６番目[*2]の規模の市となる。

N3 ART Lab（エヌ・スリー・アートラボ）は2013年に山口情報芸術センター（YCAM）が10周年を迎えた記念事業を行った際に、筆者も美術作家として参加した国際グループ展を機に、オルタナティブ・スペースとして山口市の委託を受けて山口市の駅通りにオープンしたのが始まりである。その展覧会の後、継続して主にリサイクルやエコロジー、メディア・アート等をテーマにした美術作家の作品展や食や地域文化をテーマにした様々なワークショップなどを行なった。2014年には文化庁から新進芸術家育成事業の委託を受け、若手芸術家育成を主旨としコレクティブ（集合）をキーワードに、国内外から著名な講師を招聘したレクチャーや作品展示、秋吉台国際芸術村でのシンポジウム、地元の若手芸術家と中堅芸術家の共同制作による成果作品展示やワークショップなども含むコレクティヴEAS_Y Vol.1を行なった。このスペースは2015年まで同地にあったが、2016年の建物の使用契約終了を機に、防府市に移転した。

２．文化庁主催、Collective EAS_Y Vol.2事業について

文化庁主催、山口大学制作のCollective EAS_Y Vol.2事業は2014年度のVol.1に続いて行われた新進芸術家支援事業である。山口市から防府市へN3 ART Labが移転するにあたり、山口大学地域連携室、防府市商工会議所の仲介を経て、防府天満宮所有の防府天満宮表参道にある“防府市まちの駅うめてらす”横の民家を借家として借り受け、第二次オルタナティヴ・スペースN3 ART Labとして再始動した。（図１）

Collective EAS_YVol.2事業ではVol.1を引き継ぎ、地域における新進芸術家を育成するために内外の著名な芸術家を招聘し、リサーチ、レクチャー及びワークショップ、展示、フィールドワークを行い、それを受けて地域の若手芸術家と中堅芸術家がそれぞれグループごとに対話を行い共同制作をして最後に成果展を行うというものであった。講師はVol.1のシンポジウムでも基調講演を

＊ 屋良彩姫（山口大学教育学研究科）　＊＊ 西澤佑（山口大学教育学研究科）

図１　N3 ART Labの外観

担当した愛知県立大学教授の水津功、協力者に山口県立大学准教授の倉田研治、ドイツの独創的な彫刻公園であるインゼル・ホンブロイヒを拠点に芸術活動を行っている西川勝人、BankART1929を主催しており、「続・朝鮮通信使」というプロジェクトを継続中の池田修、インドネシアとオーストラリアを拠点に活動しており、インドネシアの影絵の文化を現代美術として展開するジュマアディを招聘した。また、中堅芸術家と新進芸術家のグループ編成は次のようになった。澤登恭子＋吉田朱里 、原井輝明＋the temporary space、松尾宗慶＋臼杵万理実、ノーヴァヤ・リューストラ＋森下嘉昭である。2017年一月末に成果展を防府天満宮大専坊、N3 ART Lab、錦湯（旧銭湯）、英雲荘において行なった（詳細はコレクティブEAS_YVol.2記録集またはN3 ART Lab HPを参照[*3]）。

本事業において美術による地域連携として様々な企画内容を試すことができたが、プロジェクト内容としてワークショップやリサーチ、展覧会を行うにあたり、空き家や既存の歴史的施設の使用など、現代美術からの視点や特性を加味して行った。水津功の「みずいろベンチ・プロジェクト」は防府市都市計画課の協力を得て、地勢のリサーチとワークショップにより水色に塗られた色彩の目立つベンチが天満宮周辺に置かれた。普段見過ごされがちな個人が気に入っている風景をワークショップで提案してもらい、実現可能かどうかを防府市役所都市計画課と相談しながら選ばれた場所に実際にベンチを置いた。（図２）（図３）

本事業で展示に使用した場所として、防府天満宮ではもともと寺が所有し、毛利氏の本陣にも使用された大専坊での展示や参道とつながる商店街の旧銭湯と、かつて瀬戸内海に面していた三田尻茶屋と呼ばれた英雲荘では、成果展覧会が開催できた。現在では交通や流通、人の往来の仕方が違うため分断され、見えなくなってしまっていたかつての萩往還のルートというグランドデザインを再発見し、そこに美術作品あるいは美術展の文脈を挿入でき、人々の往来を促したことも地域における美術連携の成果の一部と言えるだろう。

図２　ワークショップによりお気に入りの場所を地図上に記入した。

図３　実際に設置されたみずいろベンチ

３．防府天満宮大石段花回廊について

一方、防府市の防府天満宮における花回廊とは交流人口の増加を目的にゴールデンウイークに合わせ、防府天満宮の大石段に、花のプランターで「幸せます」という文字を描いたものである[*4]。「幸せます」とは山口県の方言で、「嬉しく思います」「幸いです」などの意味で同市の地域活性化のため防府商工会議所が商標登録し、「ほうふブランド幸せます」として地域ブランド化を進めている。この花回廊は毎年山口県内外から多くの来場者がある。防府市や商工会議所をはじめ、観光協会、山口県立農業大学校や造園組合等で組織する防府天満宮花回廊実行委員会は2017年で５年目となる。元々はイタリアのシチリア州にある陶器で有名なカルタジローネのサンタ・マリア・デル・モンテ階段に設えられた花飾りを参考に、防府天満宮大石段をそれになぞらえ、防府天満宮大石段花回廊という名称で始まった。

本年は、この実行委員会に山口大学教育学部美術教育教室 中野良寿研究室を加え、研究室に所属する山口大学の学生に花回廊のデザイン案を複数提出してもらった。プランターを設置した際の見栄えなどを考慮に入れ、デザイン選考会を実施した。この選考会で選ばれたデザインを再現するため、2016年の10月より、花の品種・色

の選択など防府市農業大学校の監修による育苗が始まった。その苗を、防府市内の中学校３校と防府市総合支援学校の生徒に展示直前まで大切に育てもらった。また、2017年は大石段だけではなく、階段の踊り場にも同研究室の学生がアイデアを出し、プランターを活かした装飾を行った。開催に先立ち、搬入、設置時には実行員会及び関係者、総勢約60名による設置作業が行われた。以下にデザインを担当した屋良彩姫（教育学研究科２年）、踊り場でのデザイン及び設置を担当した西澤佑（教育学研究科２年）ら本人による報告を記す。

４．防府天満宮花回廊のプラン及び設置について

４－１　花回廊の色彩デザインについて

防府天満宮　大石段花回廊（平成29年度）
展示期間：平成29年4月21日（金）～5月7日（日）
花の種類：ペチュニア、オステオスペルマム、ビオラ、ベゴニア
育成指導：山口県立農業大学校
育成協力：防府市立佐波中学校、防府市立国府中学校、防府市立牟礼中学校、山口県立防府総合支援学校
主催：防府天満宮大石段花回廊実行委員会
協力：山口県立農業大学校、防府市美術連盟、防府市おもてなし観光課、防府市都市計画課、造園連山口支部、防府商工会議所女性会、佐波中学校ボランティア、山口大学教育学部、防府商工会議所、（一社）防府市観光協会、防府市まちの駅うめてらす、防府天満宮敬神婦人会、防府天満宮

花を育成したプランターを防府天満宮の大石段に設置し、「幸せます」の文字を表現した。幸せますとは、山口県の方言で「うれしく思います・助かります・幸いです・便利です」といった意味で使用される。防府ブランド幸せますには「幸せが増す」という意味も込められている。

［大石段花回廊デザイン案について］

〈コンセプト〉

・「幸せます」「幸せ」が伝播する
・メインカラー①黄色…幸せ
・メインカラー②赤色…防府天満宮

「幸せます」のロゴと鉢植え設置図面は、防府天満宮大石段花回廊実行委員会が事前に作成していた。今回のデザインでは「幸せます」と「♡」の配色を考えるにあたって、昨年度までの花回廊の配色及びデザインはどのようなものであったか調べた。インターネット上に掲載されている花回廊の写真を参照すると、一文字ごとに色がはっきりと分けられている場合や、文字全体の色味が統一されている場合があった。また、鉢植えの花の色は、黄色と白が多く、淡い色合いが美しかった。赤系統の花は発色がよく「♡」に設置されている場合が多いようであった。

デザインするにあたって、例年の花回廊と似通ったデザインにならないようにする事と、実際に花を設置する事をふまえて実現可能な配色を考案するよう配慮した。「幸せ」という言葉の色を想像した際、黄色が当てはまった。続いて、「防府天満宮」の特徴的な色といえば、梅や楼門の赤系統の色であろうと考え、この２色を花文字に取り入れることを決定した。そこで、黄色と赤色をグラデーションで繋ぐことによって、「幸せます」が徐々に広がったり、浸透したりするイメージを得た。防府市の地域にお住まいの方や、市外から防府天満宮に訪れた方に、この花回廊をみて幸せな気持ちをもたらすことができればと想い、文字の配色はグラデーションとすることを決定した。

花回廊鉢植え設置当日には、花の種類や育成具合、色味をみて、デザインに沿いながらも配置を変更していった。実際に鉢植えを大石段に置くと、デザイン案のままでは一部の花の色が沈んで見えてしまったために全体の調和を考えながら、現場の実行委員と試行錯誤を経て完成した。　　（４－１　屋良による記述）

４－２－１　花回廊の踊り場デザインについて

３月初め頃よりデザインの検討を始め、４月中旬に会議で３点のデザインを提案した。今回はその中から、梅の形のオブジェ（図４）が採用された。初期案では鑑賞用のオブジェであったが、来訪者が座って一息つきながら、花文字を鑑賞できるように、高さを調整してベンチとしての機能性をもたせることにした。そのため座り心地を考えて、座面は塗装ではなく毛氈を張り付けている。また、残った鉢植えを利用して梅の形をつくり、参道を彩るように配置した。これらのオブジェとプランターは、参拝から戻る際にも、階段の上からその景色が楽しめる。

図４　設置イメージ

４－２－２　制作

制作は、山口大学教育学部美術教育の平川和明講師の協力を得て、同大学木工室の機材を利用して制作した。材料と制作手順は以下の通りである。（図５）

〈材料〉
・ベニヤ板1,800×900（㎜）…４枚
・緋毛氈　1,800×900（㎜）…２枚
・油性ペンキ・Ｌ字金具…16個　・ゴムボンド
〈制作手順〉
１、土台となるベニヤ板を45センチ四方でカットし、４枚一組でジョイントを挟んで接合。
２、ベニヤ板を糸鋸とジグゾーで梅の花の形にカットする。
３、ルーターで製材する。
４、土台を油性ペンキで塗装し、座面に毛氈を貼り付ける。
５、現地にて、座面と土台をＬ字金具で接合。

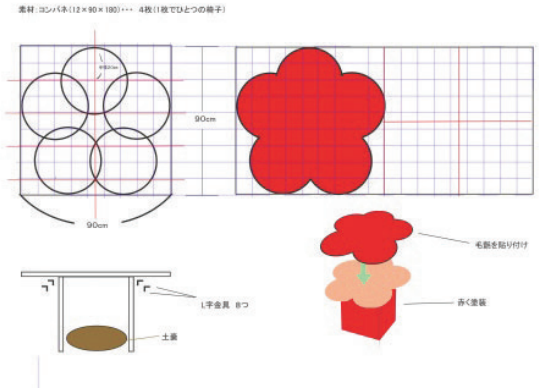

図５　図面

４－２－３　設置

オブジェは、４月20日の花文字設置と同日に設置した。場所は参道脇の４か所で、風対策としてオブジェの内側に紐を貼り、その上に土嚢を乗せて設置している。雨あがりに誤って座ってしまわないよう、注意書きも別途用意し設置している。全体的に落ち着いた展示となったが、余ったプランターの活用方法ともう一段階、参拝者が感動するような華やかさが来年以降の課題である。

図６　梅立体の設置風景
（４－２－１～４－２－３西澤による記述）

５．まとめ

防府市におけるこのコレクティヴEAS_YVol.2及び防府天満宮の花回廊の二つの事業を通じて特徴付けられることは以下のような点である。１）防府市という、歴史が長く様々な時代の文脈の断片が街の端々に残る地方都市では、天満宮や商店街、英雲荘などのようにそれぞれの時代に生まれた人や文化の流れが現在では分断されて点在している。現代アートや地域の景観をリサーチしていくプロジェクトは、普段見過しやすい地区や景色の優れた部分を発見することができる。空き家などを展覧会場にすることで、孤立していたポイントを線のように繋げることができたことも、その街が持つポテンシャルを可視化するという意味で意義があった。２）防府天満宮の花回廊は、防府天満宮がすでに信仰の対象であるとともに、観光地としての強い磁力を持つ場所であるという文脈に、さらに花回廊という一種の巨大なランドマークを期間限定で提示する企画である。最近のインスタグラムやFacebookに代表される写真を掲載できるSNSは、「インスタ映え」という言葉が生まれているように、できるだけフォトジェニックな訴求力のある写真を撮ろうという市民の欲望のはけ口の様相を呈しているが、まさに防府天満宮の花回廊はその欲求に応え得る装置になっていくかもしれない。（図７）（図８）

地方都市における美術連携のあり方としてこの１）と２）は手法としてはある種対比的な試みであるが、このような事例は大学の研究室やオルタナティヴ・ギャラリーが地域共同体の中に関わることによってできる内容として、この地域にそれまでなかった多様な価値を提供しているという意味では同じベクトルを持つと言える。

また、地域で提案を行う際に、市民、市役所などの行政、観光協会、教育機関、商店、商工会議所、寺社仏閣、博物館や文化施設などが区分けを取り払い、議論の場を設け、積極的に連携して「地域のグランドデザイン」を提案していくことの大切さも痛感した。今回両事業共に、

新聞やテレビ、雑誌を始めとする各メディアが多数取り上げてくれたことも、本事業の方向性を後押ししてくれることとなった。今後もこのような美術の視点での提案を伴う実践と分析を継続していきたい。

図７　花回廊の外観

図８　下段の花回廊の外観。場所によって中心になる図形や色彩が変わる。

付記

本稿の作成にあたり、「コレクティヴ：EASY Vol.2　地域と語る：資源×探求×記録×集合」の実施に多大なるご協力をいただいた全ての方々に感謝いたします。尚、個別の氏名につきましてはコレクティブEAS_YVol.2記録集をご参照ください。また、防府天満宮花回廊につきましては、防府天満宮宮司の鈴木宏明氏及び天満宮関係の方々、防府市商工会議所では吉田充孝氏に資料等のご提供をいただきました。関係各位に深く感謝いたします。

注

（１）本事業は文化庁採択事業「平成28年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」〈大学連携による地域文化の特色を活かした若手芸術家の育成2016〉【主催】文化庁、山口大学【制作】山口大学　【共催】山口県立大学、山口芸術短期大学【協力】防府天満宮、N3 ART Lab　【後援】防府市教育委員会、特定非営利活動法人山口現代芸術研究所（YICA）によって行われた。

参考文献

高木のぶ子（2017）『マイマイ新子』，筑摩書房
福武總一郎＋北川フラム（2016）『直島から瀬戸内芸術祭へ-美術が地域を変えた』，現代企画室
飯田泰之他（2016）『地域再生の失敗学』，光文社
寺岡　寛（2014）『地域文化経済論－ミュージアム化される地域』，同文舘出版

参照URL

＊１　防府市公式ホームページ　住民基本台帳人口より
http://www.city.hofu.yamaguchi.jp/soshiki/13/jinnkoutoukei.html（2017年９月閲覧）
＊２　山口県公式ホームページ　人口移動調査（平成29年現在より）
http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a12500/jinko/jinko.html（2017年９月閲覧）
＊３　N3 ART Lab 公式ホームページ
http://n3-art-lab.com/exhibition/hyeree-ro-santoshi/（2017年９月閲覧）
＊４　防府天満宮公式ホームページ　幸せますウィーク
http://www.hofutenmangu.or.jp/kongetunogiyouji/siawasemasuweek.html（2017年９月閲覧）